

## 史跡

### 備中国分尼寺跡

かんばやし  
総社市上林ほか

## 平安時代の塔跡発見！

備中国分尼寺は、天平13(741)年に聖武天皇の詔により、全国に建立された国分僧寺・尼寺のひとつです。当センターでは、「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業として、こうもり塚古墳の調査に続き、令和5年度から備中国分尼寺跡の発掘調査を行っています。

今年度は東方建物と北方建物、東辺築地の調査を行いました。東方建物については、鐘楼（鐘が置かれていた建物）や経蔵（経典を納めた場所）、塔といった可能性が指摘されており、今まで詳しいことが分かりませんでした。

今回の発掘調査により、中央に心柱を据え付けるための礎石（心礎）を抜き取った穴を確認したことで、塔跡であるということが分かりました。従来から国分尼寺については塔が存在しないとされており、既存寺院を転用したものを別にして、新設の国分尼寺に塔を建てた例は今まで確認されておらず、備中国分尼寺が初例となります。瓦や土器などから、塔の建設は金堂などが造営された奈良時代より後の平安時代中期（10世紀）ごろであると考えます。



備中国分尼寺 塔跡（東から）

塔の建物を支える基礎である基壇規模は一辺14.1mで、高さは1mを測ります。基壇端から約2mの幅で瓦が集中して広がり、その上層に堆積した土からは平安時代以降の土器や瓦などが出土しないことから、平安時代の中で塔が廃絶し、間もなく基壇とその周辺は埋没したと思われます。また、心礎、四天柱、12本の側柱の痕跡が確認でき、その外周に裳階といわれる雨除けの庇を持った構造であるということが分かりました。ほとんどの礎石が抜き取られていましたが、側柱の礎石である2石は埋め戻しを行った今でも、現地に行くと見ることができます。このうちの1石は上面をほぼ水平に保っており、平安時代当時の状況を留めていると考えます。

北方建物については、柱穴などが見つからず、今まで想定されていた場所には建物がないことが分かりました。その一方で、平安時代以前に造成した盛土を見つけることができました。

築地は土を突き固めた版築により寺域を囲む、奈良時代の土塀のことで、今回は東辺を調査し、築地の基底幅が北に向かうにつれて狭くなり、その先端は途切れていることが分かりました。そのため、この地点が備中国分尼寺の東辺築地端にあたることが判明しました。

今回の調査における塔跡の発見により、新設された国分尼寺で塔を建てた例として全国初という貴重な成果を得ることができました。この発掘調査成果を基に、このたび動画を作成しました。調査中に現地を訪れることが難しかった方や、発掘調査に興味があるけれど見る機会がなかった方も、この動画を通じて、全国初の発見の瞬間や、普段は見る機会が少ない調査現場の空気感をありありと感じていただければと思います。歴史好きはもちろん、考古学の最前線に触れてみたい方、必見の動画となっていますので、ぜひご覧ください。

(竹田千紘)



「備中国分尼寺跡で  
平安時代の塔発見！」  
二次元コード



塔跡基壇端の瓦出土状況（南東から）



東辺築地端（南から）  
※白線は基底幅を示す



動画内タイトル画面



動画内一場面  
築造当時のままの礎石（発掘調査中）

## さかづ 酒津遺跡

倉敷市酒津

## 弥生住居が語る

## 酒津に生きた人々の暮らし

倉時代以降の掘立柱建物ほったてばしらたてものや弥生時代中期の竪穴住居たてあなじゆうきよなどが見つかっています。

高梁川河川整備事業に伴う酒津遺跡の発掘調査を10月から再開し、3月まで行いました。昨年度から引き続き、「笠井堰」南側に位置する中州での調査を行っています。今年度の調査では鎌  
竪穴住居は奈良時代の大溝に半分以上壊されていますが、復元径は約7mにも及び、弥生時代中期中葉（約2,150年前）における県内有数の規模であることが分かりました。住居内の炭化した建築部材や焼土は、この住居が火を受けて廃棄されたことを物語っています。本事業に伴う発掘調査で初めて見つかった弥生時代の住居でもあり、高梁川下流域の弥生時代集落像解明への糸口となることが期待されます。

酒津遺跡の調査は今後も続く予定なので、これからの調査成果にもご期待ください！

（平野友梨・森本蓮）



焼失住居の調査風景（南西から）

## なかづ 中津遺跡

たましまくろさき  
倉敷市玉島黒崎

## 縄文時代の土坑墓発見

水島港唐船線改築工事に伴い、令和7年6月から10月まで中津遺跡の発掘調査を行いました。遺跡は竜王山塊から流れる屋守川りゅうおうさんかいが形成した扇状地の端部にあり、今年で2年目の調査です。

今回の調査では中世の掘立柱建物、縄文時代では早期（約9,000年前）の土器のほか、土坑墓どこうぼが2基見つかりました。土坑墓は後世の開発で一部削られていましたが、埋葬された状態がわかる人骨が残っていました。人骨2体ともに頭を東に向けての屈葬くつそう（手足を折り曲げた姿勢での埋葬）でしたが、1体は左半身を下にして横向けに、もう1体は仰向けの姿勢で見つかりました。時期は周辺の調査事例から縄文時代晩期（約3,000年前）と考えられます。今後、科学的な分析を進めることで、詳細な年代や人骨の年齢や性別が分かる可能性があります。縄文時代の土坑墓が人骨の残った状態で見つかることは珍しく、貴重な成果となりました。

（杉浦香菜子）



縄文時代の土坑墓（横向けの姿勢）

## たきだにがわ 滝谷川遺跡

ゆうか  
久米郡美咲町飯岡

## つきわふもと 月の輪古墳の麓で 弥生時代の集落を確認

一般国道 374 号（美作岡山道路）改築工事に伴い、令和 7 年 6 月から久米郡美咲町飯岡に所在する滝谷川遺跡の発掘調査を行っています。遺跡は月の輪古墳のある山の麓、吉井川と吉野川の合流点を臨む南向きの緩やかな斜面地に位置しています。

これまでの調査で、縄文時代後期（約 4,000 年前）から飛鳥時代にかけての遺構や遺物が見つかっており、弥生時代中期（約 2,100 年前）と後期（約 1,900 年前）の竪穴住居、掘立柱建物、土坑などを確認しています。

また、調査地は元々谷と丘の境に位置し、古くに土石流で埋まった谷の上に弥生時代の集落が営まれていたことが分かりました。土石流の上部で縄文時代後期（約 4,000 年前）の土器が出土しており、谷が埋まったのは縄文から弥生時代にかけての頃と考えられます。今回の調査で、飯岡地区に月の輪古墳が築かれるよりも 300 年以上前の弥生時代の様子が明らかになりました。

（稲垣和寿）



弥生時代の竪穴住居や土坑

## ふくだゆだ 福田湯田遺跡

津山市福田

## 続々と見つかる 古墳時代後期の水辺の祭祀痕跡

昨年度から発掘調査を続けている福田湯田遺跡では、古墳時代後期（約 1,400 年前）の皿川の旧流路（水が流れた跡）が明らかになってきています。古墳時代後期の流路の岸で、昨年度と同

じょうに、土師器の甕や須恵器の杯身などの土器、指先ほどの大きさの斧形のミニチュア鉄器、鉄生産時に生じた不純物である鉄滓などが見つかりました。出土状況から、これらの多くは人々が川岸で行った水辺の祭祀で使用したものと考えられます。また、中州の肩口では地面が焼けた痕跡を 3 か所で発見しました。この痕跡の近くでは土製の蒸し器である甑なども出土しました。これらの発見により、旧皿川で行われた古墳時代の水辺の祭祀では土器や鉄器を使用するだけでなく、火を使った儀礼もあった可能性が考えられます。

（藤井雅大）



古墳時代の川岸に散らばる土器



## 令和7年度 企画展2 「吉備の装いと彩り」

令和7年10月16日（木）から令和8年4月12日（日）まで1階展示室で、企画展2「吉備の装いと彩り」を開催しています。遺跡の発掘調査で見つかる数々の出土品のなかでも、身なりや外観を飾るモノは特に彩り鮮やかで、とても見応えがあります。

今回の企画展では、岡山市・百間川原尾島遺跡、新見市・横田東古墳群などの県内各地の遺跡から出土した縄文時代から古墳時代の装いに関わる彩り豊かな遺物（紡錘車、機織り具、玉類、耳飾り、豎櫛、木製の短甲や盾、漆や赤色顔料の関連遺物など）を展示し、古代の装いや色彩感覚、それに関わる知恵を凝らした技術や幅広い交流について、最新の調査研究成果を踏まえながら紹介しています。

赤、黄、緑、青、白、黒、金、銀などのカラフルな展示品を通じて、古代に生きた人たちの意識や価値観を感じとってみませんか？

この機会にぜひご覧ください。（米田克彦）



企画展2の様子



海を渡ってきたガラス



## チャレンジ！考古学教室（津島遺跡コース）

今年度からの新企画で、6・7月の古代吉備文化財センターコースに続き、9・10月には津島遺跡コースを史跡津島遺跡（津島やよい広場）及び遺跡&スポーツミュージアムにおいて、3回にわたって開催しました。このコースは、整備された史跡内で様々な体験をするもので、考古学・歴史好きの高校生10名に参加していただきました。

初回の9月27日（土）は、津島遺跡の発掘調査成果の講義を聴き、津島やよい広場を見学し、この遺跡のことを学びました。2回目の10月4日（土）は、古代体験（勾玉づくり・粳すり）とミュージアムの展示品について勉強会を行いました。3回目の10月25日（土）は、「津島遺跡やよいまつり」での古代体験のサポート又は遺跡&スポーツミュージアムでの展示解説のどちらかを選んで活動しました。スタッフの立場で津島遺跡や埋蔵文化財の公開活用にかかわる体験をしていただきました。（難波拓史）



粳すり体験のサポート



火起こし体験のサポート



展示解説にチャレンジ！



## 津島遺跡やよいまつり

令和7年10月25日（土）・26日（日）に県総合グラウンド内にある津島やよい広場（史跡津島遺跡）を会場として「津島遺跡やよいまつり」を開催しました。時折雨の降る曇天というあいにくの天候でしたが、2日間でのべ1,800人以上の方々に参加いただきました。

今年度も火起こし、勾玉づくり、弥生人に変身、古代米の収穫・粳すりなどのやよい体験、復元住居や遺跡&スポーツミュージアムでの解説、クイズラリーを実施したほか、土器パズルや勾玉形スポンジを積み上げる「勾玉をつもう！」のコーナーも行いました。

今回は、職員やミュージアムスタッフ、津島遺跡ボランティアの皆さんだけでなく、「チャレンジ！考古学教室（津島遺跡コース）」に参加した10名の高校生にも一緒に盛り上げていただきました。（小林有紀子）



当日の様子（左：火起こし体験、中央：古代米の収穫・粳すり体験、右：弥生人に変身！）



## 吉備の史跡を巡る

### びっちゅうまつやまじょう 史跡備中松山城跡（高梁市）

令和7年12月13日（土）に「吉備の史跡を巡る」を史跡備中松山城跡にて開催しました。講師として高梁市教育委員会の三浦孝章さんをお招きして解説いただき、参加者の皆さんは、広大な城跡を歩きながら、城の特徴や歴史を学びました。見学は大池（全国でも最大規模の城郭の貯水池）から始まり、備中兵乱の古戦場跡と伝えられる相畑城戸跡を經由し、小松山城の大手門跡や三の丸・二の丸・天守などを訪れました。戦乱の時代を生きた先人の営みを肌で感じることができ、参加者の皆さんにとって地域の歴史に親しむ好機会となりました。（藤井雄一）



大池の見学



小松山城の見学



## 吉備路ウォーク

史跡作山古墳、史跡こうもり塚古墳、  
史跡備中国分尼寺跡（総社市）

令和8年1月24日（土）、吉備の中枢にある遺跡を巡る「吉備路ウォーク」を開催しました。今回は史跡備中国分尼寺跡、史跡こうもり塚古墳、史跡作山古墳の約4kmを巡りました。

今年度から発掘調査が始まった作山古墳では、調査を担当された総社市の岩橋惇也さんに最新の調査成果についてお話いただきました。

こうもり塚古墳では、横穴式石室の中に入り、その特徴の解説に加え、石室や石棺の大きさを体感いただきました。当センターが令和5年度から調査をしている備中国分尼寺跡では、調査担当者が新設の国分尼寺としては全国初例となる塔跡を確認した調査時の状況などを交えながらその成果について説明しました。

参加者の皆さんからは、「丁寧に解説をしてもらえておもしろかった」「また参加をしたい」などの感想が寄せられ、大変好評でした。（杉浦）



作山古墳の見学の様子



備中国分尼寺跡の見学の様子



## 講演会「考古と民族からみた“ものづくり”」

令和8年2月28日（土）、講演会「考古と民族からみた“ものづくり”」を県立美術館で開催しました。

深澤芳樹先生（元奈良文化財研究所副所長）には、「弥生人のものづくり」と題し、翡翠の勾玉、糸づくりや機織り、盾、稲作について、列島各地や中国の発掘調査成果や関連資料をもとに、豊かな知見に基づいた幅広い視点とやさしい語り口で御講演を賜りました。

上羽陽子先生（国立民族学博物館教授）には、「人類と線状的道具－編み材と結束材に注目して－」と題して、インドやインドネシアでの民族学による豊富なフィールドワークに基づき、タケや葉などの植物から様々な道具を生み出す知恵と工夫、人類とものづくりとの関わりについて、明快に御講演いただきました。

講演のあとは、考古学と民族学が対話するように、ものづくりについて深澤・上羽両先生と語り合う座談会を行い、和やかな雰囲気の中で、ものづくりの本質を考える貴重な機会となりました。（米田）



深澤先生の様子



上羽先生の様子

## センター 収蔵品紹介

上東遺跡出土の  
木の葉形土製品

## 弥生時代に押された葉脈の跡

平成10(1998)年、倉敷市上東遺跡から奇妙な土製品が出土しました(写真1)。上東遺跡は、主に弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡で、この資料は多量の弥生土器(後期)が出土する溝12から顔が描かれた分銅形土製品などとともに見つかりました。長さ8.6cm、幅5.7cm、最大厚さ1.2cm、表面に葉脈を押し付け、おそらく側面は元の葉に合わせて形作られています。土器の底面に葉脈がある例は知られていましたが、葉の形そのものを模した土製品は珍しいものです。当時は何の葉を押し付けたのか分からないまま、月日が経ってしまいました。

最近筆者は、岡山県自然保護センターの藤田拓矢さん(当時)と知り合いになりました。その時この土製品を思い出し、葉の同定が可能であるか聞いてみると「分かるかもしれない」とのこと。そこで同センターで植物に詳しい柿真理さん<sup>かきまこと</sup>とともに、葉脈を鑑定していただきました。この資料の葉脈は、主脈から分かれた側脈が、最外縁でさらに外側に枝分かれています。このような特徴は柿さん<sup>いわ</sup>曰く、「現存している樹木では、アサ科のムクノキかエノキ、クワ科のクワで、土製品が元の葉を模して作られていたのなら、形状からエノキは外れ、ムクノキかクワ。どちらかと言うとムクノキに近い」とのこと(写真2)。ムクノキは今でも御神木になることがある樹木で、葉はザラザラしているため研磨の材料としても使われます。クワの葉は、蚕の餌としてよく知られています。

藤田さんと柿さんのお陰で、葉の種類を絞ることができましたが、弥生人がなぜこの葉を選んで土製品としたのか、どのような想いを込めて作成したのか、などまだまだ疑問が尽きないところです。しかし発掘から数十年を経て、謎の一端だけでも明らかとなり、当時の調査担当者として少しだけ肩の荷が下りた気分です。(小林利晴)



写真1 木の葉形土製品



写真2 ムクノキ(撮影:柿真理)



編集・発行

### 岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻1325-3  
TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142  
WEB <https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/>

- ◎ 交通案内 JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩40分  
JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩25分
- ◎ 業務時間 AM8:30～PM5:15
- ◎ 休業日 土・日曜日及び祝日、年末・年始
- ◎ 展示室の開館 AM9:00～PM5:00  
土・日・祝日も開館しています。(臨時休館あり)

HP・SNSも随時更新中

Q 古代吉備文化財センター

